

会長の挨拶 14 職業の本質と職業分類

専門科学的立場から職業の本質を議論する必要はない。ただ人生の構造は、基本的には、各人一人一人に対して自己の労働投下によって金銭を獲得し、それによって自己の生計を支える義務と責任とを課するという点にあるということ、そして、各人が特定時点において選定した労働投下の種類が個別化されて職業となるということができよう。だから、個別的かつ理論的に考える限りにおいては、職業の選択と変更とは各人にとって自由自在なものである。

しかし、現実はその簡単には参らない。それは職業そのものが対人関係を必要とすることと、自己の労働投下を金銭に交換する場合、必ず買い手の自主的判断に基づく購買意欲と金銭の自発的支払いの行為がなければならぬからである。それからこのような一箇の取引がその満足、不満足の反射的効果として信用、不信用の心理的状态を産み出し、その態度が取引の長期的安定への重要なキーポイントとなる。つまり職業を簡単に変える者は絶えず信用ゼロから出発しなければならないという不利な条件を負わされるのみならず、過去の職業変更の履歴が決断の曖昧さ又は不信用の客観的証拠とされるからである。

このようにして当然の帰結として、職業と職種との長期的継続性というものが現れてくる。

ただこの職業の性質は一般論的には、上のようであっても、人類の歴史を紐解いてみると職業の在り方は基本的社会構造の変遷の支配を受けており、今日においても、この点は全く同一である。

続きは次回にします。

(小堀憲助著 『ロータリー思想の理論構造』より引用)